

昭和二十六年

七月十五日

第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三六六号)

慈

光

第一十三卷

第七号

次

慈愛と真実 (4) 近角常観 (1)

謡曲と仏教 (6) 福島政雄 (6)

唯念佛のみぞ残れり (9) 榊原徳草 (9)

念佛詩抄 (11) 木村無相 (11)

愛児を失える母上に捧ぐ (14) 山本晋道 (14)

「求道用心集」抄 (24) 源通寺 (24)

目

慈 愛 と 真 実 (六)

近 角 常 観

十四、慚愧懺悔

親鸞聖人は「教行信証」の信の巻の終に、前記の「涅槃經」の阿闍世王入信の文を引用して、その劈頭（へきとう）に深刻なる悲歎述懐の文がある。曰く、

誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず真証（しんしよう）の証に近づくことを快（たのし）まず、恥ずべし、傷むべし

実際に痛切骨を刺すの感がある。しかして「歎異抄」に、唯円坊が聖人にたずねたる不審も、符合を合わせたるが如くである。曰く、

念仏申し候えども、踊躍歡喜のこころおろそかに候こと、またいそぎ淨土へまいりたきこころの候わぬは、いかにと候べきことにて候やらんと申しいれて候いしかば、

踊躍歡喜の心おろそかなるは、定聚の数に入るを喜ばぬ

よろこぶべきこころをおさえてよろこばせざるは煩惱の所為（しよい）なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくの如きの我等がためなりけりとしらでいよいよ頼もしくおぼゆるなり。

「涅槃經」に「阿闍世王の為に涅槃に入らず」とある一語につきて、甚深微妙の密義あることを説かれてある。つづくその意義を味わいきたるに、たしかにこの「歎異抄」の本拠の如く感ぜらるのである。曰く、

為とは、一切の凡夫、阿闍世とは普（あまね）く一切五逆を造る者なり。またまた為とは、即ち是れ一切有為の衆生なり。われ無為の衆生の為に世に住せず。何を以ての故に、夫れ無為は衆生に非ざるなり。阿闍世は即ちこれ煩惱を具足せる者なり。また為は即ちこれ仮性を見ざる衆生なり。若し仮性を見るものには、我久しく世に住せず。何をもっての故に、仮性を見る者は衆生にあらざるなり。

たしかに阿闍世王というは、仏在世の阿闍世王ばかりのことではない。今日の煩惱具足の凡夫のことを仰せられたのである。定聚の数に入ることを喜び得るならば、凡夫の数には揆らぬのである。喜び得ざるは煩惱の所為である。それを仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫のためにと

のである。急ぎ淨土へ参りたき心の候わぬは、真証の証に近づくことをたのしまぬのである。してみれば、これはむしろ唯円坊の信後生活の述懐であらねばならぬ。

親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり。聖人まず唯円房の心を知ろしめすのである。次の「仏かねてしろしめして」の教訓を、まず聖人の身をもって示したもうのである。

よくよく案じみれば、天におどり、地におどるほどに喜ばぬことを憐愍し矜哀（こうあい）したもう大慈悲の救濟である。あだかも生活し得ざる人、働き得ざる人を飽くまで助けんというが物質的救濟であると同様である。

仰せられたることなれば、喜ばぬにて往生はいよいよ一定他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られ、いよいよ渴仰に堪えぬのである。「歎異抄」の次の文に、又淨土へいそぎまいりたきこころのなくて、いささか所勞（わづらい）のこともあれば、死なんずるやらんとこころぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫より、今まで流転せる苦惱の旧里はすぐたく、まだ生れざる安養の淨土はこいしからず候こと、またことによくよく煩惱の興盛に候にこそ。名残り措しくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこころなきものを、ことにあわれみたまうなり。これが真証の証に近づくことをたのしまずという悲歎と同一なる慚愧である。我等を待ちかねたもう如來の淨土へ急ぎ参りたき心なくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんと心細くおぼゆるとは、如何にも聖人が、我等の心底を洞察されたるお言葉である。しかし娑婆の縁つきるまで名残り惜しき心のやまぬは煩惱の所為である。彼土に参りたる刹那に至りて、はじめて煩惱の黒雲はやく晴れ、法性の覺月すみやかにあらわるのである。それまでは、たとい如來の大悲に徹底するも、この娑婆においては煩惱におおわれて、仮性を見ることは出来ぬのである。

むしろ煩惱があるだけ、ますます大悲大願がたのもしきが信後生活の光景である。「涅槃經」の阿闍世王のために涅槃に入らず、という言葉を、梵語の上より諸種の意味を、「涅槃經」に示してある。曰く、

「また為（い）とは名づけて仏性となす、阿闍は名づけ

て不生と為（な）す。世（せ）は怨に名づく。仏性を見ざるを以て煩惱の怨生するが故に仏性を見る、仏性を見ざるなり。煩惱を生ぜざるが故に仏性を見る、仏性を見ざる

が故に大般涅槃に安住することを得。これを仏性と名づく。この故に名づけて阿闍世と為す。善男子、阿闍

は不生に名づく。世は世法に名づく。為は不汚（ふわ）に名づく。世の八法の為に汚がされざるが故に、

無量無邊阿僧祇劫（あそぎこう）涅槃に入らず、と。

かくの如く煩惱具足の我等は、如來の大悲大願ならでは助からず、一たび大悲大願に助かりて彼岸に往生して見れば、法性の覺月すみやかにあらわれて、尽十方無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益する身となるのである。かくのごとく淨土に往生するは往相の廻向である。淨土より還りて衆生濟度をするは、還相の廻向である。しかして何れもこれ如來大悲の廻向ならざるはない。

十五、往相と還相（げんそう）

南無阿彌陀仏の廻向の

とを得たと感謝しておらるのである。

故に家庭生活をするも、聖德太子の化儀（けぎ）にのつとりて、信仰上同心一体の精神を実現せられ、流誦（りうたく）の逆境に處しても、なお感謝して曰く、
「大師聖人若し流刑に処せられたまわづば、我亦配所に赴（おもむ）かんや。若し我配所に赴かずんば何によりてか辺鄙（へんぴ）の群類を化せん。これ猶師教の恩致なり」

と。しかして阿闍世王の入信も、イダイケ夫人の得忍（とくにん）も、つらつら彼を思い、静かにこれをおもうに、今日逆惡の凡愚、五障の女質を救済せんがために、大聖権化（ごんげ）の善巧方便の事実なりと確信せらるるのである。實に還相廻向の思相は、煩惱の林、生死の園において、如來善巧の攝化を示現さるものにして、人生を莊嚴し、靈化し、美化する清淨なる源泉と言わねばならぬ。

今三谷氏が母堂を追慕さるときは、必ずや大悲の権化として、生育の恩を感謝せらるであろう。聖德太子磯長（しなが）廟扁（ひようくつ）の偈に曰く、

大慈大悲本誓願

大慈大悲の本誓願

愍念衆生如一子 衆生を愍念すること一子の如し
是故方便從西方 この故に方便して西方より
誕生片洲興正法 片洲に誕生して正法を興す。

恩徳広大不思議にて
往相廻向の大慈より

往相廻向の大悲をう

還相廻向に廻入せり

如來の廻向なかりせば

淨土の菩提はいかがせん

大願のふねに乗じてぞ

生死の海にうかみつつ

有情（うじょう）をよぼうてのせたもう

如來が我等に廻向したもうに、往相・還相の二つがある往相というは、如來の本願の教を聞き、念佛して信樂獲得すれば、淨土に往生して無上涅槃の極果を証するのである。還相というは、一たび往生して真如法性的境界に到りぬれば、また穢土の我等を憐みて、煩惱の林に遊び、生死の園に入りて、種々の神通を現じ、應化身（おうげしん）を示すこと、あだかも觀音の三十三身を示現する如くである。親鸞聖人は聖德太子をもって觀世音菩薩の化身とし、法然上人をもつて大勢至菩薩の垂跡（すいじやく）とし、我二菩薩の引導によりて、はじめて如來の本願を信するこ

我身救世觀世音 我身は救世の觀世音

定慧契女大勢至 定慧契女は大勢至

生育我身大悲母

我身を生育する大悲の母は

西方教主彌陀尊

西方の教主彌陀尊なり。

真美真如本一体

一体現三同一身

日域化縁今已尽

還來西方我淨土

為度末世諸衆生

父母所生血肉身

父母所生の血肉の身を

遺留勝地此廟堀

勝地たるこの廟堀に遺し留む

三骨一廟三尊位

過去七仏法輪所

大乘相應功德地

一度參詣離悪趣

決定往生極樂界

決定して極樂界に往生せん。

これ實に聖德太子の家庭の理想を示されたものである。

しかして太子は觀世音、曇妃（かしわでのひ）は大勢至、母公間人皇后（はしひとのこうこう）は阿彌陀如來の権化なりということは、弘法大師が磯長廟堀に參籠（さんろうせられしとき、感得せられたる靈告である。大師はこの時放光地（ほうこうち）を証せられたといふ。親鸞聖人

— 4 —

— 3 —

もまたこの廟壇に詣でて道を求められ、遂に法然上人の選択本願の教を受けて太子の理想を平民的に顯現されたのである。ここにおいて往相の廻向は、如來の本願力の我等に与えたもう慈愛と眞実のすべてであらねばならぬ。

仏陀一代の説法も、詮じ来れば往相、還相に外ならぬ。

「涅槃經」において、如來寂を示して涅槃常住の境界に入りたもうは、往相の有様である。

「華嚴經」において、森々（しんしん）たる華藏世界（けぞうせかい）より諸仏菩薩の示現したまいて、文殊、無碍の一一道を説きて、普賢大士の徳にしたがうは、明らかに還相の有様である。

いま三谷氏の母堂も大悲の権化として、七十八年尊き一生の間、慈愛と眞実を体現せられたるは、還相の廻向である。化縁すでに尽きて、病を現じ、寂（じやく）を示して彼の法性の淨刹に往生して、法身常住の如來として、絶対に慈愛と眞実を示さるは、往相の廻向である。

嗚呼、今や彼の寂静無為の境界より、再び穢土の我等を照見し、蓮華藏世界よりこの園林に遊戯したまいて、化益を垂れたもうべし。かくのごとく往相・還相循環して尽くる時なく、前者は後者を導き、後者は前者を訪い、連續無窮にして、無辺の生死海を済度したもうらん。ここに三谷氏母堂の引導の下に、我等有縁の人々ともに、忝く如來の

遺教を服膺（ふくよう）し、つつしみて絶対の慈愛と眞実の恩徳を感謝し奉る。

一 蓮院師法語

善きも悪しきもわがためとなれば、外へはやられぬ也。信を得たる人は、人の善きもわがためなり、人の悪しきもわがためなり。皆我方へこけみて、喜びの縁となり、或はわれへの意見となる。

今日に及んで われ思ひあたれり

宿かさぬ うらみも はれて 野邊の月

○ ○

昔は、山寺がうらやましかつたり、鼠衣（ねずみごろも）が恋いしかつたり、よろこびごころがほしかつたが、そんな心がつづいたならば、つづく心をたのみにして、またも迷うっていたに、今はたのみにする程の心がないゆえに、御慈悲ひとつがたのまれるようになつたぞよ。

教

福島政雄

あって、その人から習い始めたのである。後に広島に移つてからは、広島高師の名教授であつた西晋一郎博士から教えていただいた。二三人一緒に習つたのであつたが、西先生は倫理学者でなかなかの思想家であったので、謡曲一番の稽古がすむと、その謡曲について何か感想を物語られたそれが面白かったので夜の十二時近くまでお邪魔してお話を聴いたこともあつた。謡曲には一種の悟りの境地がある

「八島」の終のところなどは、戦つていたと思つていたのが、いつのまにか夢がさめて、敵と見えたのは群れていた鷗、鴎（とき）の声ときこえたのは松風であつたとなつてゐるところなどなかなかに好いと言われた。また「蟬丸」の逢坂山の道行（みちゆき）を讃嘆されたこともあつた。私もあの道行は大変に好きで暗誦している。秋の月夜などあの道行を謡つていると、何とも云えず好い。それにまた蟬丸の謡曲は終戦後私に特別の感銘を与えるようになつた。京都でお能を見た時は涙が止められなかつた。終戦後の皇室の御事、日本國の有様が私の身にせまつて感

せられたのである。

広島では後には玄人（くろうと）の辰巳孝一郎という方に教わった。一ヶ月に一度大阪から来られたのであった。私は非常に忙しい生活の裡に稽古を続けたので進歩はあまり著しくはなかつた。それでも熱心ではあつたので、兎に角謡えるようになつた。まだ父が生きていた頃父の前で謡つていたら、父が批評して、その調子で進めばいまに天狗になる。自分はどう／＼天狗にならずに終つたと言つたことがある。此の天狗になるということは問題であつて、すべて謡いものの進歩は耳と声とが躍進的に進むということである。耳と声とが同時に揃つて進まないで、耳が声を追いつき、声が耳を追いつきするというのである。耳の方が進んで來ると自分の謡が大変下手にきこえる。声の方が進んで來ると自分の謡がよくきこえて、此の時天狗になるのである。それで天狗の状態がながく続くようであれば、その人の謡曲の進歩は止まるということになる。

天狗になつたかと自分自身のことを考えて見れば、どうも天狗にはならなかつたらしい。私は五十三歳の頃まで稽古を続けたが、いつも初步の状態であった。謡曲は一度狂気じみて見えるほど熱心にならねば本当に進歩するものではないと西先生が云われたことがある。ところが私は忙しい生活の裡で稽古しているものだから稽古日と次の稽古日と古どころではない。思えば稽古をやめて既に三十年になる謡う機会も極めて少く、結婚式の時「四海波静かにして」を五度ばかり謡つただけである。併し父の形見の宝生流の揃いの謡曲本は大切にして保存している。

謡うことは稀になつても謡曲の文句や内容は折に触れて私の頭にうかんで来る。謡曲の中で私が最も好きなものは「葛もの」である。すなわち上品な女性が主人公となつているものであつて、羽衣とか玉葛とか野宮とか井筒とか大原御幸とか松風などである。羽衣は殆んど暗誦していた。松風も私の特に好きな謡である、これは熊野（ゆや）、松風、俊寛に米の飯とか云つて多くの謡曲好きに愛されているということである。実は私が最初に謡曲の一一句を謡うことを教わったのは父から教わったのであるが、それは松風の中の「面白やなれても須磨の夕暮れ」というところと、加茂の中の「汲むやこころもいさぎよき」というところであった。松風の「はこぶは遠きみちのく」というところなどは私の大変好きなところで、父と一緒に謡つたおもいである。私の心に染みこんでいる。

一方ではまた「狂女もの」というのか私の心に染みこんでいる。三井寺、桜川、百万、隈田川などであるが、母親がはるばるとその子をたずねて行くところに無限の情が湧く。隈田川だけが子供が死んでいるので大変にあわ

の間に復習も予習もしないことが多かつた。それで私の謡曲は結局初心の状態で続いたのである。初心の状態と云えば善い意味にもなるが併し私のは悪い意味であつて、折にふれて人にきかせたいという有様であつた。

一体謡曲というものは下手、達者、上手、名人という四つの段階があると宝生九郎さんが云つておられる。素人の謡などは謡の列に入らないと云われている。それに謡曲といふものは自分で謡つていると面白いが、他人の謡曲をきいては、よほどの上手、名人の謡でない限り決して面白いものではない。聞く方が迷惑である。ところが謡曲の稽古を始めて熱心に二年ばかりやると自分では面白くなつて来る。人に聞かせたくなる。それが初步初心の状態である私の場合にはそれが二十年も続いたからたまらない。宴会などで私と同席した人はいい迷惑である。味噌が酸ばくなるような謡をきかせられる。面白くも何ともないが、けなすわけにも行かぬという有様であつたと思う。まことに慚愧の次第である。謡は正式には酒をのんだあとに謡うものではないと聴いている。此の撻（おきて）を守つていなければ沙汰の限りと云わねばならぬ。

戦争中に辰巳さんが亡くなられ、その後私は満洲から京都、横須賀、東京と転々して、終戦後は無実の罪で教職遂放になつたりしたので、全く沈淪の生活に陥つて謡曲の稽

れであるとは私は最初に母から聞かされている。私は隈田川を謡うと中途で涙が出る。うたえなくなることもある。三井寺や桜川は母が子をたずね出すのでまことに嬉しい謡である。総じて狂女ものを謡つていると、私は亡き母のことを色々に想ひ起こすのである。

謡曲の全体には仏教の精神が底流となつてゐる。親鸞聖人の仏教とは趣がちがうけれど「誓願寺」には次のようないところがある。

唱ふれば仏も我もなかりけり、仏も我もなかりけり、南無阿弥陀仏の声ばかり、至誠心深心廻向発願の鐘の声耳にそみて有難や。誠に妙なる此教へ、十声一声数わかで、悟りをも迷ひをも迎へ給ふぞ有難き。さるほどに夕陽雲にうつろひて、西にかけろふ夕月の夜の念佛を急がん。夜の念佛をいさや急がん。

おもえば謡曲に親しむこと既に五十年と云つても好い。遠くドイツのベルリンに行つていた時も、淋しい心でベルリンの街を散歩しながら謡曲を微吟して「花筐」のお能の有様などを心に思い浮かべて如何ばかり慰められたか。謡曲には仏教の精神がある、その仏教にも私は祖師聖人のお蔭で深く心を寄すること既に五十余年、私には此の世の終りの日まで謡曲が親しまれ、仏教が心の導きとなるであろうそれが父母の追憶と一つに融けるのである。

ただ念佛のみぞ残れり

榎原徳草

私の恩師の池山先生は六十八歳でご往生になりました。

先生の所へ行けばどんな事も解ける、そういうお念佛を聞かせて貰つておったのに、先生が亡くなられて始めて寒々とした念佛しか自分に残つていらないことに気づきました。

私はそれまでは「好き人」を信じておったお念佛であつて、本当の「お念佛」がわがものになっておらなかつた。その好きな人が亡くなつてみれば、歎異抄第二章の前段「よき人の仰せこうむりて」の、好き人に憑（つ）かれていたのであって「ただ念佛して」がそれに附隨しておつたようであつた。つまり「好き人」が表面に大きく出て「ただ念佛して」が裏面に添えものになつた感があつた。

先生が亡くなつて寒々とした念佛しか残つていない時はじめてそういうことを思いました。歎異抄第二章の後段の「弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば云々」では、弥陀の本願が最初にクッキリと出てくる。名号や本願、本願や名号で、名号が本願であつて、本願は本願として出てくるのではなく、名号として生きているのです。名号は言葉であ

りけり」と、私の煩惱具足の身に入つて下さる。煩惱具足罪惡深重の私達に「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたことなれば、他力の悲願は、かくのごときのわがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」と、聖人が「われ」と仰言つて、私達を「ら」と呼んで下さる。この「われら」の中に聖人と一緒に私達がはいるこの「ら」の中に如來の大悲心、善巧攝化の深い慈悲が満ち満ちていると仰いであります。

「ら」が私達に入る場所であります。私共の坐る、落着く、坐りのつく場所です。私の落着く、念佛の坐りがつく場所は聖人と共にはいる「ら」の中になります。「かくのごときのわがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」たのもしく念佛の坐りがつき、私共が身も心も安らぎうるのは「ら」の中でのたのもしさの念佛であります。弥陀の本願が本当に私にまで「ら」の中に入り満ちて下さるのであります。

歎異抄第二章のはじめは「よきひと」中心に、親鸞はこいうよきひとから聞いたのですというお念佛でありますから、「よきひと」が表に出ている。後段になつて、本当のお名号が表に現れる。阿弥陀仏の本願、念佛の慈悲そのものを「弥陀の本願まことにおわしまさば……」とお念佛の光りを後背とした真向きの聖人が現れる。

りますけれども、生きていのちが入つてゐる体を現しているのです。

本願とは南無阿弥陀仏であります。「弥陀の本願が眞実であるならば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したもうべからず、善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとなんや、法然の仰せまことならば、親鸞が申すむまたもてむなしかるべきあらすうか」念佛から権化して仮りに人間の姿をとつて私達に近づいて下さる、和光同塵（光りを和らげて塵に同ず）して下さる念佛のその大きなお慈悲が、釈尊となり、善導大師とあらわれ、法然上人となり、親鸞聖人となり、池山先生となつたのであります。

だから権化の源は弥陀の本願そのものの南無阿弥陀仏であります。南無阿弥陀仏がそういう相をとつて私達に近づいてきてくださるのであります。若し念佛が直接出現したならば、私達には触れられないから、姿をとつて形を変え、私達の煩惱の中に煩惱の衣を被つて、そこに立つて、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてあ

しかし「そのとき聖人はフト姿を消される」と池山先生が仰言つたことを思い出すのです。本願寺に参拝しても御影堂の方が大きく、阿弥陀堂の方が小さい。勿論よき人聖人を通さなければお念佛は聞けないが、然し本当は直接阿弥陀仏に拝面するため御影堂の親鸞聖人が化現されたわけです。その御影堂の方が歎異抄第二章の前段に主となつて出ており、後段の「弥陀の本願まことにおわしまさば云々」の所に阿弥陀堂が主になつて出ているのです。私達は池山先生が生きておられる間は御影堂であったが、御往生になり、私は戸惑いしたが「弥陀の本願まこと」と阿弥陀堂が真向になつて現れて下さつたのでありました。

池山先生が、いつか、白骨の御文章になぞらえて「ただ念佛のみぞ残れり」と仰言つたことを想い出すのであります。何もない、唯念佛のみだ、何も残らない、お念佛だけが姿を消して、くつきりと雲間に浮ぶ明月のようにわが身に浮かぶのであります。又「念佛は自動作用する」と仰言つた、念佛 자체が働いて下さつて私とお念佛とを一つにして下さる、この先生のお言葉を思うのであります。

念佛詩抄

(二)

木村無相

念佛ひとつに まよいなく
念佛ひとつに 腹ふくる

こまつたときには
念佛ひとつに

みほとけ我れを
念佛ひとつに

お念仏さまに
相談しなされや
因幡の源左の
ことばです

夢殿

お太子さまは 夢殿に
わたしの夢どの
ナムアミダ

ことあることに
ナムアミダ

ナムアミダブの
夢どのに――

そのみほとけの
ねんぶつを
我れたまわりて
ナムアミダ

となうれど
法藏がんりきと しらざりき

智慧の念仏うることは
法藏願力のなせるなり

ナムアミダブと となうれど
法藏がんりきと しらざりき

ナムアミダブと となうれど
智慧のねんぶつと しらざりき

ナムアミダブと となうれど
智慧のねんぶつと しらざりき

わたしのためとは しらざりき

まん中に

おねんぶつは つつむ
天地をつつむ

おねんぶつは つつむ
一切合切

わたしを まん中に
天地をつつむ

おろかな
ままに

おろかな
ままに

あちらでも
こちらでも

ナムアミダブツ
おじよう土の声

ナムアミダブツ

道

道がある
道がある

たつた一つの
道がある

極重悪人 唯称仏

おじよう土の声

うしろで

ねんぶつもうす
わたしのうしろで

ねんぶつもうす
かたがある

常ねんぶつの
によらいさま

常ねんぶつの
によらいさま

常ねんぶつの
によらいさま

ごおんとく

いつもお念仏の
外にいる

外にいるのに
内にいる

こんなおかしい
ことはない

こんなフシギな
ことはない

外にいるのは

わたしの性(しょう)
内にいるのは
ごおんどく

ナムアミダブツの
ごおんどく

おやさま

わたしの
おやさま

こんなわたしを
どうでもと

なんにも

言うことなし
なんにも

言うことなし
なんにも

ナムアミダブツ

(昭和四六・二・十日)

愛児を失える母上に捧ぐ

山本晋道

る十三日夜、いとしい子供を亡くした事でござります。道

子という末子で今年六才でございます。それが僅か一昼夜の患いで主人の旅行中死んでしまいました。私は唯ボーと致しまして夢ではないかと思いました、やっぱり夢ではありますでした。

一日一日と日がたつにつれ、あゝすればよかつたとか、こうすれば助かったかもとか、第一母としての注意が足り

なかつたと思い、又医者として多少行き届かぬところもあつたように思われ、取りかえしのつかぬ事を繰り返し／＼思ひ浮べ、悲しいやら情ないやら、死んだ子供には申訳なさで胸はにえくりかえる様でござります。

嗚呼、先生私はどうしたら宜しいのでしようか。平生お聞かせ頂いてお慈悲を思い出して、お念仏申させて頂いても、唯一時胸の苦しさをおさえつけておく様な気持であきらめもつかず、有難くもありません。どうしたのでございましょうか。

私は仮縁の深い広島生れで、両親も大変喜んでおりましたので、何事にもお祈りなど致す気持はありませんでした

……先生、私は今悲しみのどん底におります。それは去

二 某婦人の書信

が、子供が苦しみながら息も絶え／＼になりました時は、

お念仏をとなえながら、一生懸命にどうぞ助けてやつて下さいませと祈らずにはいられませんでした。常日頃、そう

したことは何の役にも立たぬといふことも、広大なお慈悲につつまれておるということとも聞かせて貰つております。のに。私は聞きようが足りず、お慈悲がわからせて頂いていないのでしようか、私は自分自身が分らないのであります。どうか一言でもお聞かせにあづかれは何より仕合せと存じます。……。

三 亡き敬一をおもう

このお手紙を読みながら、私は亡き敬一を思い涙ぐみました。長男敬一が痩痢で夢のように死んだのは昭和三年五月二十七日午前一時であります。十年前のことですけれども、その前後の思い出は余りに深刻に私共夫婦の胸に刻みついていて、今でも思い出すと胸が疼きます。

敬一は当時五才で可愛い盛りの子でした。みめ好い松は早く枯れるとか言いますが、あの子はことに可愛い利灑な子供でした。親の欲目からばかりでなく、誰からもほめられ可愛がられる愛くるしい子がありました。

当時私は、富山県立高岡中学の教諭でありました。学校には色々の騒動が続いて起つて極めて不快な生活でしたが、家庭的にはこの子と二男信二がいて、一家揃つて散歩経質の子の敬一は、どうしても起きてすると云つてきかずおかわに抱えてやる時に、ひどいけいれんが何回も来ました。夜明け方になるとけいれんも来なくなり、すやすやと眠りますので、経過がよいのだろうと安心しておりました然し何となく気にかかりますので、早朝、中学に出勤の途中、校医を訪ねて昨夜のこと、その朝の容態を話しますとサツと校医の顔色が変り、しまった！と言わんばかりですその驚愕の顔色を見て私もサツと冷たいものが背筋を流れました。事の重大さを直感したのです。

何もかも、もう駄目でした。私と共に駆けつけた校医は一見するや、危篤と宣告しました。すやすやと眠り続けるのに安心していたのが大失策でした。昨夜のうちに容態は取り返しのつかぬ所まで進んでいたのでした、手遅れでした。昨夜の内に知らせなければいけなかつたのだというような校医の口吻を聞いた時、私の胸の中はにえくりかえるようでした。

何も知らぬ私共に、何故それならそうと注意して下さらなかつたのだろう。あれ程早く手当をして頂いたのだから安心しきっていたのに、今朝になつて何ということを今更云われるのだろう。「痩痢かも知れぬから念のために」一位の話ではなかつたか。夜半の往診の御苦労をお氣の毒に思つてこそ控えて朝まで待つたのだ。それ程一刻を争う危険

や近くの山登りなどして慰められて居りました。

近くの中学校長宅の広い庭園で夕方まで機嫌よく遊んで帰つた敬一が、その日に限つて夕食の食欲がなく、食べながらうとうとと眠りかけるのでした。欲しくなければお休みなさいと、妻は二階の別室に連れて行きました。敬一は自分で何事もなく床の中に入つてやすみました。

中学生四、五年の上級学校入学志願者を担任して忙しかつた私は、当時自宅でも受験準備授業をしていました。その夜も数名の生徒の講義に忙しいまま、格別子供のことは気にもかけずにいた私でした。

夜の八時頃、かねて子供の病氣に敏感な家内は、敬一は熱が少しあるようですが云います。その頃高岡市には痩痢が流行して新聞でも報道し、私共も敏感になつていましたので、早速近くの校医を招きました。校医は「痩痢かも知れぬ、時節柄万全の策を取つておこう」と、直ちに胃洗滌浣腸、内服薬と処置して下さいました。痩痢の経過について何の知識も持たぬ私共若夫婦はそれで安心いたしました。処置が終ると私は生徒への講義を夜おそくまで続けました。

洗滌浣腸の結果は格別何も出ず、不消化のままの漬物が少し出た位でした。夜半に二、三回便通があつて、その時おむつがあててあるからそのまましてよいというのを、神な病氣なら、遠慮なく喚びに来いと云つて下さらぬか。早朝からでも診察に来て下さらぬか、等々頻死の愛兒の枕頭で私の胸はにえくり返るのでした。

その日、注射其他あらゆる手当が講ぜられたが駄目でした。刻々と容態は悪くなるばかりでした。遂に、うわごとを言うようになりました。レコードで覚えた童謡を次から次と歌うのです。聞いている私共の心になつてみて下さい時々夢の中でニッコリほほえみます。突然「アンメ！アンメ！」と叫びます。近くの学校の土手の上を同じ年頃の子供達が走り廻るので、家内が敬一を戒めて「危い！危い！」というのを片言に「アンメ！アンメ！」と叫ぶのです。しばらくうとうとしてはニッコリ笑います。

全く絶望状態に陥つて、注射も効かなくなり、瞳孔は拡大し、脈搏はかすかになり、刻一刻と別れが近づきました二十七日、午前一時、いよいよ最後と思つた時、泣いて抱きしめ乍ら、私は必死に叫びました。

「敬ちゃん！敬ちゃん！」まだわかるのが敬一はかすかにうなづき乍らパツチリと眼を開けました。耳もとに口をつけて私は叫びました。

とうちやんもかあちやんも、すぐあとから行きますよ。

ねえ、敬ちゃん！さようなら！」

泣き崩れる私共の心に応ずるかの如く、かすかにうなづいて、弱々しく、それでも力一杯、最後の努力をしてくれたのでしよう

「さようなら」

と一言答えて敬一は死んで行きました。

○

息切れで後も体にはまだ温みがありました。せめて夜明けまでなりと抱いてあたためてやろうよと、死んだこの子を抱きしめて、夜明けまで妻と泣き明かしました。遠い北国に赴任して九州の親族も間に合わず、どうしてよいか途方に暮れている私共に、敬一が通っていた教会の幼稚園の先生方は誠に親切にして下さいました。

白木の寝棺に、アーチガレットの純白の花を埋めて、一番好きだった大きな木製の汽車とカバンを入れて、棺の蓋は顔の上だけはガラスにして、最後まで告別の出来るようにしてやりました。

○

じくなつた日、かねて註文してあつた敬一の好きな童謡のレコードがつきました。死んだのちでもせめて聞かせてやりたいと、冷たくなつた枕頭で泣き乍ら何度も／＼このレコードをかけました。……

○

当時の私は未だ確たる信仰の対象はありませんでした。

その頃ようやく朝日が射しました。東の方から射しこむにぶい太陽の光の中で、焼灰の中の白いお骨を点々と拾いながら、私の心はしみじみと魂の行方のことを考えました。大学時代に、宗教文学に触れて、何とはなしに私の中にかもし出されていた宗教的な境地、魂の故郷、寂光の淨土とでもいう境地がしみじみとしたわれました。

○

多くの知識階級がそうであるように、私もただ漠然と、神仏、宇宙、生命、大いなるもの等を考えて居りました。そして時々の宗教的法悦、或は興味で満足しておりました。寺院に詣でてもピッタリせず、教会に行つても満足せずせめてあどけない童心あふれる讃美歌でも歌つては一人慰め、或は汎神論的な、文学的な法悦に触れてはまぎらしていた位でした。

だが、今や愛児の突然な死は、深刻な打撃を私に与えました。今までのような漠然としたものではこの心の疼きはまぎらしようがありませんでした。しかし寺院にも教会にも満足出来ぬ私にとっては、何処で求めてよいのか方向がわかりませんでした。

今から考えて見ますと、私共は全く精神的ルンペ恩でありました。大概の場合こうして満たされぬまま過ごしている内に、時もたち、境遇も変り、満たされぬまま何時しか苦悩もまぎれ、悲しい記憶もうすれて行くのが常であります。私も危くその魂のルンペ恩を続けるのでありました。が、何とした幸いか、その後諫早（いさはや）に転任してホツと安心したのも束の間、此處でも再び、外にも内にも行き詰ってとうとう安勝寺御老院にお目にかかることになり、合掌念佛するようにお育ていただいたわけでした。

当時まだはつきりした宗教を持たなかつた私共は、因縁のまま、敬一が喜んで通つた幼稚園のある教会で、しめやかな告別式をいたしました。棺の上のマーガレットの白い造花の一輪を今でも私はその日のアルバムにはつて取っています。

翌日、五月二十八日早朝、郊外の広い平野の中にある火葬場にお骨捨いに参りました。その朝のことは忘れられません。生まれて初めてお骨を捨うのです。而もそれは私が大学一年の時に生まれて、夫婦心をあわせて育てあげたかがえのない子供の遺骨です。まだどうしても死んだと思われぬわが子が白々とした小さいお骨になつて目の前にあります。家内と二人、ほとほと泣き乍ら小さい壺の中に拾つては入れました。

その頃ようやく朝日が射しました。東の方から射しこむにぶい太陽の光の中で、焼灰の中の白いお骨を点々と拾いながら、私の心はしみじみと魂の行方のことを考えました。大学時代に、宗教文学に触れて、何とはなしに私の中にかもし出されていた宗教的な境地、魂の故郷、寂光の淨土とでもいう境地がしみじみとしたわれました。

○

仏願の生起本末を聞信させて頂いて見れば、悲しい敬一の死の思い出が、今ではただ悲しいだけではなくなりました。悲しみは今も変りなく、この思い出を綴りつつ涙をとどめ得ぬ私ではありますけれど、悲しい中にうれしいのです。敬一が死んで見せて、にぶい私共の魂をゆすり、めざましてくれたことがわかつたからです。

夢の世にあだにはかなき身を知れと

教えてかえる子は知識なり

この一首の味が今こそはつきり私にわかります。

いろはにほへとちりぬるを

わかよたれそつねならむ

うゐのおくやまけふこえて

あさきゆめみゝゑひもせす

この味が今こそ私にわたります。

浅い夢をいつまで見続けてよかるうぞ、何時まで酔いしれていてよかるうぞ。み仏は幼い子供の姿を取つて、死んで愛別離苦を深刻に味わわせて見せて、世の無常に早くめざめ、常住の極楽に生まれんことをおすすめ下さつたのでありますまい。

死んだ子は果たして我が子であつたでしょうか。我が子となつて御催促上さるのではありますまい。

教えてかえる子は知識なり。まことにあの子こそ、私に
とつての善知識ではありますまい。

西の岸より、み仏は悲心招喚して下さるのに、私共
はほんやりして、夢の世を夢とも知らずに、ただうかうか
と明かし暮らして居ります故に、先立つ愛兒を縁として、
尊い御催促を受けて居るのですありますまい。

釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し

われらが無上の信心を、发起せしめたまいかり

祖師聖人のこの御和讚を敬一をおもうたびに私は心にう
かべます。

○

仏願を聞信して見れば、地上一切の出来事は、み仏様の
お喚び声に私共を立ちかえさせて頂く縁でないものはあり
ません。悲しいままほほえむことが出来るのは、その悲し
みや憤りを縁として、み仏さまのお心にかえさせて頂くか
らであります。だから、自分の心の始末を自分でつけよう
ともがくよりも、一度はつきりと御慈悲に遇うことが大切
です。一念発起の上からは喜ぶなど云われても、お慈悲に
立ちかえって喜ばずには居られませぬ。悲しい涙の底から
「生死の苦海ほとりなし、流转の我の悲しさよ」としらさ
れ「かかる苦惱の我がために、弥陀の悲願は成就せり」と
どどこまでもお見捨てなき、向こうから御廻向下される

挨拶頂く度に涙が出て、どうにもならぬ私共でありますた
けれども、御返事の代りに心の中でお念佛申しました。

○

はかなく死んで行つた敬一や順五は果てしなき生死の流
れの中にかりに結んだ泡のようなものでした。私共父母を
縁として、この世に出て来た小さな一つの流转輪廻の泡で
した。まぼろしの如き存在でした。何処から来て何処へ流
れて行きましたやら、行末遠く涯て知らず、生死の流れの
み永劫に彼等をのんで流れています。思えば淋しく味気な
い限りです。

更に驚くべきことは、敬一や順五が流されて行つたこの
恐ろしい一つの流れの中に、私共も流されているといふこ
とです。私共もこの同じ生死の流れに浮ぶ一つの泡でしか
ありません。或時は岸边に沿い、或時は岩にもまれて、前
後左右の泡と共に、或は遇い、或は別れ、先になり、後に
なって今までこうして生きながらえて来ましたが、何時
どんな縁にあつてフッと消え去りますことやら。思えは危
いことであります。泣いたことも笑つたことも、福も禍も
パッと泡が消えたらそれで一切おしまいです。

思うてここに到るとき、夢の如く消えて行つた可愛い子
供達は、私共に手厳しい御催促をしていてくれるのではあ
りますまいか。死んで行つた子供達の幻を追うて泣いてば

大悲心に圧倒されて喜ばずには居られません。

○

信仰生活上、諦めるというのは、唯單に「思い切る、悲
しまぬ」というような冷たい無内容なことはなくて、煩
惱具足の私共が、愚痴も瞋恚も悲歡もそのまま持ちながら
その出来事によつて、日頃人生を甘く見て足の浮いていた
のが、ハッとめざめさせられて「ああ、夢の世であった。
無常の世であった。生死の苦海であった。頼りにならぬの
が人の世であり、煩惱具足の人間であったのに……」と気
付かされ、それにつけても「みなもてそらごとたわごとま
ことあることなればこそ、早く生死の苦海を出でよと、
南無阿弥陀仏を御廻向下されてあるのであつた」と氣付か
せて頂くと、涙流したまま、このみ仏のかねて知るしめし
ての御親切に出遇つて、たのもしさにほほえまして頂ける
のでありますまい。

○

私はこの諫早で再び五男順五を失いました。可愛い盛り
の二才でした。この子は数日の間に肺炎で亡くなりました
初めから一生懸命手当した積りでしたけれどもとうとう駄
目でした。

しかしこの時は、幸いにも私共は泣き乍らお念佛申す身
に育てて頂いておりました。悲しいことに変りはなく、御

かり居すに、私共は子供達が死んで見せて戒めてくれる自
分の足許を、しつかり見直さねばいけないのであります
んか。子供の生死を縁として、私共自身の生死の大問題に
早く目覚めねばならぬのではありますまい。

子供のために泣く涙も美しい、しかしもつと深めて、生
死の流れに流された子供と共に、自分も一刻と流されて
いることにめざめて驚くことがもつと大切ではありますま
い。

○

ここに、子供を思うて泣く涙が、自分の後生の一大事に
気づかせて頂く手がかりとなり、自分の後生の一大事のた
めに、如來の悲願のましますことを知らせて頂くとき、私
共ははじめて子を思い、自らを思いつつ、心から念佛の中
に安住の天地を見出せるでしよう。

如來の本願を聞信すれば、仏は私を生死の苦海から救い
あげて、やがて仏の悟りを開かせて頂き、そのまま生死の
流れに浮沈するいとし子のあとを追うて、六道四生いすれ
の業苦に沈んで居ようとも、たすけとげて下さる仏の濟度
の大行と一つになつて働かせて頂けると聞きますから。

「死んだ子に一目あいたい、あの子は何処へ行つたやら
今頃どうして居るやら」こう思うて泣かぬ親はありますま

い。ことに母親は父親よりも深刻でありましょう。乳房が張るにつけあの子をもう一度抱きしめたい。ふと押入れあててあの子の玩具を見出しつては泣き、下駄箱に小さいあの子の履物を見つけては涙ぐみ、同じ年頃の子供をみては立ちどまつて亡き子の幻を追う。子にさき立たれたあの親の心ほど悲痛なものがありますまい。

あなたのお手紙読みながら、私共夫婦は身につまされて泣きました。

○
ことに「ああすればよかつた、こうもすればよかつた。私共の不注意、手ぬかり、あの子に済まぬ」と私共も思いました。ひそかにお医者様も恨みました。あなたの心地はよくわかります。

けれど一切は愚痴であります。手ぬかりではありましたが、よくよく考えて見ればその時はそれだけしか気のつかぬ私共でした。それ以上の知識も能力も経験も持たぬ私共でした。許してくれと亡き子にわびる外はありません。泣いても泣き切れぬことですが、ただ詫びて泣くより外どうしましょう。

医師への恨みや愚痴も、よく考えればすまぬことです。死なせたい医師は一人もありませぬ。不親切でわざと注意のぬかった医師ではありますまい。こちらから言えば不足

に触れられたのでありますよう。

如来の祈り！これこそ親鸞聖人の心に大転廻を来たらしめたのです。
この子をどうか助けて下さいという悲痛な私の叫びこそ如来の一如法界（いちによほつかい）から立ちあがり、発願修行して下さらずにいらねなかつた根源であります。

私の祈りは未通らず、生死の流れに浮沈する身は、未通りて人を助けとぐること能わない故に、如来はまず私にこの生死を出する道を得せしめ、しかも心ゆくまで有縁を助けて行ける身となして下さろうと願をおこされました。

一度この如来の祈りに覚める時、最早人間の祈りの要是ありません。「我をたのめ！必ず救う」の御一言は、悲痛な私の胸の底の、祈りも涙も何もかも知りつくしておわしませばこそ「早く我をたのめ！」のお喚び声であります。このお心にめざめた一念が南無阿弥陀仏であります。そこに最早私の自力の祈りは無用であります。何もかも知りつくして、祈り抜いて救うて下さるお心に遇うた安らかさ一つであります。

○
この御慈悲にはつきり遇うことが肝要です。もだえる胸をまざらす道具にお念仏申してみてもさばけるものではありません。

この御慈悲にはつきり遇うことが肝要です。もだえる胸を色々の人生の出来事がゆり驚かせて下さいます。銀紙を

の数々はあつても、医師もその時、その場の業縁にしばられて生きて居る以上、完全ということは要求する方が無理であります。たとえ不親切な医師、未熟な医師であつて、処置に重大な過失があつたとしても、かかる医師にめぐりあう外にすべのなかつたあの子であり、私共であつたのです。又如何に手ぬかりなく初めから完全な手当をして、治らぬ病氣であつたのかも知れませぬ。

業道流転（こうどうるん）の身の悲しさ、亡き子も医師も私共も、結局、業に縛られて流されて行く人間でしかありませぬ。ただ詫びあうより外に、共にうなだれる外にすべはありませぬ。

○
愛児の臨終に祈らずに居れなかつたあなたの心地も無理はありません。刻々に絶望になり行くいとし子を前に、何とかして下さいと身を悶えぬ親がありましょうか。

祈りは人の真心のありつけたけの燃焼です、爆発です。良いとか悪いとかの批判を超えた魂の叫びです。何人かこれを批判し冷笑する資格がありますよう。

○
親鸞聖人はこの祈りを冷たく否定されたのではありません。祈るな、と叱りつけられたのでもありません。必死に祈らずに居れぬこの悲痛な涙の奥に、如来の切々たる祈り

人間の悲しみは、聞き覚えた宗教の話位で押えつけて解消するものではありません。耳に聞き、頭で覚え、お話を聞いた時だけ心に味わつた位のお慈悲の有難さでは、いよいよとなつたら涙の一滴も始末はつきますまい。聖人の仰せられる信心とは人間の作り出したものではありません。この信心は私の心中にありながら、私のものではありません、そのまま如来のものであります。

であればこそ、泣いても苦れても、この心一つは相続して私の力となつて下さいます。私の内における如来の生命の純粹持続であります。だから力むことも、ひきよせることも要らず、つとめて思い出して喜ぶことも要らず、自然にもくもくと、しみじみと、内から、向こうから私を動かして、御慈悲へと向かわせて下さいます。

○
どうしたらそんな真実信心が頂けるか？

聞く一つです。念仏がまだ真実に自分の生きる力となり切つて居ないと気がついたことは有難いことです。気がついた上からは一層心ひきしめて、ほれぼれと大慈を聞かせて頂くことです。

頂きもせぬのに、ボンヤリと聞いて落着こうとする私共を色々の人生の出来事がゆり驚かせて下さいます。銀紙を

張った竹光（たけみつ）では、生きた問題が切れません。人事の一切はたとえ外的には解決しないまでも、信仰の上からは、心の中では解決します。碍りあるまま、心一つは碍りなく生きて行けるのが無碍道です。

聖人は「念佛者は無碍の一途なり」と仰せられました。さばけぬまま、心一つはそれにつけてもお慈悲に立ちかえらせて頂いて「そうであったか！」とうなづかされて生きられるところに救われた者の無碍道があります。

この世は娑婆なのです、忍ばねば生きられぬ業道なのです。それであればこそ淨土は成就してあります。生死の苦海にありながら、無理な愚痴や瞋恚に苦しまず、生死を速やかに出すべき道を聞きひらくのです。

念佛は、私共がかかる苦惱の世界に居ればこそ、出離生死の船筏（せんばつ）として、私に恵まれてあるのです。

○○様

聞きようが足りませぬ、あなたのお気付きの如く、この度の驚きを生涯の驚きとして、これからはつきり今一步踏みこんで聞いて下さい。貴女のその胸の苦惱の始末を、自分でつけようと小細工せずに、その涙に同（どう）じて悲泣して下される如来のお心を聞いて下さい。

貴女一人で悶えて居られるのではありません。その悶え

はそのままみ仮の胸を疼かせて居ます。そして、亡き子の方に向いて悶えて居る貴女をこそ如來は悲心招喚して居られます。「お前の心はよくわかるぞ。我にたよれ必ず救うぞ、何時まで泣かせはせぬぞ！」と。今は亡きいとし子の胸は切々と疼いたまう。貴女は今こそ涙を通して仰いでこの大悲の本願をお聞きひらき下さい。

（昭一三、一、八、）



前号の記事の訂正

佐々木師の「ある死刑囚の手記」の記事中

一、七頁。死刑囚B君は朝鮮で生れ、父母と共に岐阜県に移住。

二、十三頁。上段。

本多まつえ先生とB君の追悼法要は名古屋東別院で盛大に行われたが、これは日本鍼灸医会長の市川四郎さんの発起によりました。

いた心が仏法ではない。

仏力難思

四、五十年來、机に倚り、夜も風も命がけ、屋寝せず、読み書き、写したり、調べたり、相談したり、命がけでこしらえた助かり道具、どっさり負いねて、たつた今すぶずぶと墮ち行く処を、それなり、ひとつ捕らまえられて助けられるばかり。

あら恐ろしや、あら嬉しや、あより外の言の葉もなし
南無阿弥陀、ああ南無阿弥陀、南無阿弥陀。

「奇なるかな、仏力難思、古今いまだあらず」（信巻）

聞きざし

聞きざしとは、そのままと云うこと、仕上げのいらぬこと。今をも知られぬ至極短命の機を、もらさぬとの大悲ゆえ、聞きざしということと実に尊し。

聞きざして今日はこの世をかしづかな

定散のかざりをしてまるはだか

ただ願力にひかれてぞゆく

法照禪師、文殊菩薩にあうて

「只今、我身に相應の法は何ぞや？」

「まさに念佛すべし、今これ時なり」

天上の月一輪

大津波に残るものは天上の月一輪。仰せが仏法なり、聞

あとがき

只今梅雨が続いて、洪水の被害も報せられています。やがてきびしい夏が待つておられます。それに付けても皆様の御無事を祈念申し上げます。

謹告

七月号から、郵送料も倍になりましたし、其他物価があがりましたので、左記のように「慈光」の誌代を改正させて頂きました。但しすでに前納御購読の方には、その期間は従来通り改正いたしません。右御諒承願います。

誌代 半年分 四〇〇円、(送料共)

一年分 八〇〇円、(送料共)

近角先生の「慈愛と真実」は、大悲の至極をおつたえ頂いております。そして私共の身近かな実生活の上に往々還相の信味をおおしえ下さいました。福島先生は、大地から草木の生ずるようち頂きました。拙原様の原稿は、京都の高倉会館の日曜

講話からの抄出文を、同会館発行の「ともしひ」から転載させて頂きました。池山先生が或時、ニイチエの言葉を引かれて「師よ師よと師に追従するばかりが師につかえる道ではない。速に師の冠を取れ、その時こそ師が心から喜ばれる」というようなことを語られたのを思い併わせました。一味の信もこうしてひらけることです。木村様の「念佛詩抄」を続いて頂きました。生涯を聞法一つに貫かれる一筋の道を開く花の趣きを覚えます。

故・山本晋道師の「畢竟依」から「愛児を失る母上に捧ぐ」の一文を頂きました。これは、私自身子を持ちませぬため愛児を亡くされた方々の涙にふれても、何一つ申し上げ得ないことを悲しく思つておりますが、山本師が愛児二人を亡くされた愛別離苦の涙の底に渴仰される如來大悲の信味を同じ悲しみの某婦人に告げられているこの文を読み、早速お願ひしてここに掲げました。山本師は明治三十五年福岡県に生まれ、五高から東大英文科卒業、昭和四年頃念佛聞法の身となり、昭和八年に長崎で聞思会を創設し、篤信の医師高原憲先生と共に法灯を掲げられましたが、終戦後、惜しくも急逝せられました。御年四十六才であります。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半一道

会例会。

町。教西寺。法話会。

市電、新郊通り一丁目下車、東へ三筋

目、左入ル。

市バス、北山町下車。市電、御器所通り

下車。

定価	半年	一年	四〇〇円(送共)
印 刷 人	名古屋市南区駄上町二ノ八八	花 田 正 夫	
編集・発行人	愛知県西加茂郡三好町大字福谷		
名古屋市南区駄上町二ノ八八	吉 野 穂 志 郎		
郵便番号	電話八二一局七〇三七番		
郵便番号	振替口座名古屋一〇四七〇番		
社	社		